
聖夜の奇跡

紅月蒼空

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

聖夜の奇跡

【Nコード】

N1157D

【作者名】

紅月蒼空

【あらすじ】

王都ラドールで彫金師として働くデイラックは、聖夜祭の日、仕事を終えた後、自分の愛する妻と娘の住む村へと帰る途中だった。

(前書き)

これは「ギフト企画」によって書かれた作品です。

聖夜の奇跡

「ああ、寒い寒い」

氷竜の月。一年で最も寒い月。デイラック ライムフリーは、オランダ王国の王都ラドールで、いつものように路上で彫金の仕事をしていた。

デイラックはもともと彫金師というわけでもなく、誰かを師にしたわけではないが、生来の器用さでラドールでは指折りの彫金師として知られている。

彫金師にとって、聖夜祭のある氷竜の月はかきいれ時だ。

当然デイラックにとってもそれは当てはまる。だから、デイラックは自分の住む村ヴィラから、わざわざ時間をかけて王都まで出向いているのだ。

「よう、デイラック」

デイラックが寒さにかじかむ手に息を吹きかけて暖めていると、声をかけられた。声がした方を向くと、顔馴染みの客が立っていた。

「あんたか。何か用か？」

「指輪を見せてもらいたんだが……」

その男が恥ずかしそうに答えるのを見てデイラックは笑う。

「あんたもやつと覚悟を決めたか」

デイラックのその言葉に男は照れながらもうなずく。

「まあな。今年の聖夜祭にプロポーズしようと思ってる」

その男の決意の表情にデイラックはひとつうなずき、

「しょうがねえな。特注で作ってやるよ」

そう言って紙を準備し、どんな指輪がいいかを聞き始める。

街は聖夜祭に向けて活気を帯始めている。

その日の注文を午前に採り終えたデイラックはラドールの郊外に

ある工房街の自分の小さな工房へと向かう。この工房街の工房の持ち主たちは代々受け継がれている伝統ある職人たちばかりで、ディラックのような人間はいない。

誰かに師事したことのないディラックはたまたま、空いていた工房を買い取って自分のものにしたに過ぎない。数年前に、突然ディラックは王都に現れ、瞬く間のうちに王都屈指の彫金師となったのだ。ヴィラにディラックが住み着く前に、彼が何をしていたのかわかるものは、ヴィラにもラドルにもいない。

工房に着くと、早速作業を開始する。倉庫に厳重に保管してあるマテリアルから必要なものを取り出し、自分が思い描くデザインへとゆっくり変えていく。

この作業の時のディラックはとても集中していて、髪の色と同じ緑色の目が研ぎ澄まされた輝きを放っている。

こうしてディラックはその日の午後いっぱいを使って、作業を進めていった。

「おかえり、パパ！」

ディラックが家に帰ると、四歳になる愛娘のミルフィーユと妻のファリアが出迎えてくれる。ミルフィーユは、後ろで結った父親譲りの緑色の髪を揺らし、母親譲りの蒼い瞳には嬉しそうな輝きを灯して、ディラックに抱きついてきた。

ディラックも娘のそんな様子に疲れた体が癒されるような心地になり、嬉しそうにミルフィーユを抱き上げる。

「いい子にしたか、ミルフィーユ？」

ディラックは自分の少し伸ばした髪をいじりながら、ディラックの髭に頬ずりしているミルフィーユに尋ねる。

「うん！ 今日だね、ママのお手伝いをしたんだよ。ね、ママ！」
そう言ってミルフィーユは、先ほどからミルフィーユたちの様子を微笑ましそうに見ていたファリアのほうを振り向く。

ファリアは微笑みながら頷き、そして、ミルフィーユを抱いていないほうのディラックの手を取りその手のひらに、おかえりなさい、と書く。

ファリアは、しゃべることが出来ない。これは生まれつきではなく、幼少のころのある出来事が原因でそうなったのだ。

そんなファリアに対して、ディラックは優しい表情を浮かべ、ファリアの頭を軽く一撫でする。

そんな様子を羨ましそうに見ていたミルフィーユは、自分にもやっほいたいというかのように、ディラックの頬を触る。ディラックは苦笑しながら、ミルフィーユの頭を撫でてやる。

この夜の一家団欒はこのように過ぎていった。

依頼を受けてから数日後。 聖夜祭、当日。ディラックは完成した指輪を持って、ラドルの路傍、いつもの場所で依頼人の男が来るのを待っていた。

ディラックが待ち始めてから、程なくして依頼人の男は現れた。

「出来たんだって！？ どんな風になった！？」

予め完成したという旨の手紙を送っていたので、その男は前置きもなくそう言った。ディラックは男のそんな様子に苦笑しながら、それから、完成した指輪を見せてやる。

指輪を見た男は、嬉しそうに頬を紅潮させ礼を言う。

「これであいつに今夜プロポーズできるよ」

二人の馴れ初めから知っているディラックは、

「受け取ってもらえるとは言っても、一世代の見せ場だ。プロポーズの言葉はちゃんと考えてるか？」

そう尋ねる。その言葉に、男はちよつと困った表情を浮かべ、
「それがなかなか……。あいつにきざに決めても仕方ないからな。
ディラックは、どんな風にプロポーズしたんだ？ 参考までに教え
てくれないか？」

と、逆に聞いてきた。問われたディラックは、あきれた様子で、
「俺のなんか参考にしても仕方ないだろ。自分で考えろ」

と、すげなく返す。それを聞いた男は、肩を落としながらも、礼
を言つて帰つていった。

「プロポーズ、か」

ディラックは、男を見送つた後、そう呟きファリアと出会つたと
きのことや、プロポーズしたときのことを回想する。

ディラックとファリアが出会つたのは今から七年前で、ディラッ
クが二十五歳、ファリアが二十二歳のときだ。

その時、ディラックは焦っていた。当時のディラックは、盗賊団
の頭をやつていて、その街で一番の金持ちだったネイル家に単身忍
び込んでいた。ディラックが頭をやつて時の盗賊団は、基本的には
強奪よりも盗みをすることを主としていた。

ディラックがネイル家の金庫に忍び込み、そこにある金目のもの
を外に運び出そうとしていたところ、そこに現れたのがネイル家の
一人娘ファリアだったのだ。

ディラックを見たファリアは硬直してしまい、まったく動けない
ようだった。ディラックは大声を出されてはまずいと思い、ナイフ
を取り出し一気にファリアに迫った。

基本的に殺しをよし、としないディラックはすばやくファリアの
後ろに回り首筋にナイフを当て、声を上げるなど脅す。

もちろんファリアはこの時にはすでに声を失っていたので、声を出
すことなどもとより出来なかった。

首筋にナイフを当てたディラックもファリアの様子があまりにも不審だったので、ナイフを当てたまま、何かしゃべってみろ、と声をかけてみる。しかし、ファリアは何も答えない。

そこでようやくディラックは声を失っているという可能性に気がつき、そう尋ねてみた。すると、ファリアは恐る恐るといった感じで頷いたので、ディラックは一つため息を吐き、ナイフを首筋から離した。

そして、改めてファリアを正面からゆっくりと見てみる。

腰まで伸ばした蒼髪に、蒼い瞳。やや細身ではあるが、出るころはそれなりに出ていてバランスの取れたスタイル。美人と言うよりは、可愛いと言った表現の似合う顔立ち。

こんな状況にもかかわらずファリアはディラックの視線に思わず頬を染めてしまう。その様子をディラックはつい可愛いと思ってしまった。そして、彼は頭を掻きながら、ファリアに、何も盗らないから自分がここに忍び込んだことは誰にも言わないでくれないかと頼んでみる。その頼みにファリアがこくこくと頷いたので、ディラックは軽く笑って、忍び込んだ窓から外に飛び出る。出て行くときに、縁があったらまた会おうと言う台詞を残して。

次に、ファリアとディラックが出会ったのはそれからそんなに後のことではなかった。その出会いは、ファリアが街の外にある泉に遊びに行ったときだった。大怪我を負ったディラックがファリアの目の前に現れたのだ。ディラックはファリアの目の前に現れた途端意識を失って倒れてしまった。

ディラックの怪我の様子を見たファリアは慌てて従者を呼び、ディラックを家へと連れ帰り医者に診させた。

それからしばらくして、医者の治療とファリアの献身的な看護もあり、ディラックは意識を取り戻し、怪我の状態も良くなりつつあった。

ディラックが意識を取り戻してしばらく日が経過した後、ファリアは思い切って、ディラックになぜあのような怪我を負ったのかと

尋ねてみた。

ディラックはしばらく黙っていたが、ファリアの視線に耐えられなくなり、やがて語り始めた。

ディラックによると、彼がファリアの家に忍び込んだとき、何もとって帰らなかつたので、盗賊団内部でディラックに対する不満が出始めた。最初はそうでもなかつたが、もともと先代の頭は認めていた殺しをよしとしないディラックに対して、盗賊団内部で結構の不満があつたようで、その不満と重なり、今回の不満が徐々に膨らんでいった。

そして、その日部下たちが、ディラックを襲つたのだ。ディラックは一番強かつたとはいえ、人数があまりにも多かつたので勝ち目はなくあのような怪我を負つたのだ。

ディラックの話を聞き終えたファリアが、これからどうするのかと、ディラックに尋ねると、わからないと、ディラックは答えた。

その答えを聞いたファリアは、それならば自分の執事をやらないかと申し出た。ディラックは最初、その申し出に驚いていたが、いく充てもない上に、執事をやっていけば素性を隠せるのではないかと考え、その申し出を承諾した。実際に、ディラックが執事となるには、ひと悶着ファリアの親とひと悶着あつたのだが、ファリアが頑固に言い張つて、認めさせた。

その日から、執事としてのディラックの日々が始まった。最初のうちは、ファリアは話したいことを紙に書いていたが、だんだんディラックと親しくなるにつれ、ディラックの手のひらに指でなぞるようになっていった。

そんな風にして二人が親しくなり、お互いの間に主従以上の感情が芽生え、育まれていった頃、二人の出会いから二年経つた時。事態は、二人にとって悪いほうへと動いた。ディラックの素性がファリアの親にばれたのだ。当然、親はディラックを警官に突き出そうとした。

しかし、それをいち早く察したファリアがそのことをディラック

に教えたので、ディラックはすぐに逃げることにした。その時に、ディラックはファリアに別れを告げたのだが、ファリアは、自分も付いていくと行ってディラックを離さなかった。ディラックは、悩んだが、嬉しくもあったので、後悔しないかどうかをファリアに尋ね、連れて行くことを決心した。

こうして、二人は駆け落ちし、ヴィラへと住むようになったのだ。こうして、二人は駆け落ちし、ヴィラへと住むようになったのだ。その一年後に、ミルフィーユは誕生した。

ファリアとの出会いからこれまでを家へと帰る途中思い出していたディラックは、改めてファリアへの愛情、そして、ミルフィーユへの愛情を確認した。

「夕方には間に合いそうだな」

この調子で歩けば、夕方には家に着く。今日は聖夜祭だから、夜は家族でパーティをやることになっている。当然、プレゼントもある。ファリアには自分が作った指輪を、ミルフィーユには、欲しがっていたヌイグルミを。

二人が喜ぶ姿を思い浮かべ、ディラックは笑みを浮かべる。と、ふと後ろに人の気配を感じた。この道は人通りが少なく、特に、聖夜祭のとき何かは、ほとんど人がいない場所だ。不審に感じて、振り返ったその瞬間、ディラックは腹部に熱い衝撃を感じた。

「がっ……！」

呼吸を漏らしつつ、腹を見るとそこにはナイフが深々と刺さっていた。前に視線を移すと、そこには浮浪者のような身なりをした男が立っていて、ディラックの腹に刺さっているナイフの柄を握っていた。

「ぐっ……」

何とかその男から距離をとろうとするが、体に力が入らずそのま

ま倒れてしまう。男は、倒れたディラックをしばらく見ていた後、ディラックの荷物を漁り、ファリアに贈るつもりだった指輪を取り出し持ち去って行ってしまう。

「く……そ……」

そう呟いたきりディラックは動かなくなってしまった。ディラックが最後に思い浮かべたのは、愛する娘と妻だった。

「パパ、遅いねー」

テールについているミルフィーユはそう言ってつまらなさそうに足をぶらぶらさせる。もうすでに夕刻は過ぎているのにディラックはまだ帰ってこない。ディラックは、夕方までには帰ると言っていた。そして、今まで一度もディラックは約束を破ったことはなかった。

ファリアは、胸に不安を覚えたが、仕事が長引いているんだろうと考え、その不安を振り払う。しかし。

夜になり、外が暗くなってもディラックは帰ってこない。

「パパア……」

ミルフィーユの目には涙が浮かんでいた。ファリアの不安も増すばかりだ。しかし、母親としての自覚がしっかりあるファリアは、ミルフィーユの手をとり、その手にゆっくと、

『パパが早く帰ってくるように、お祈りしようか』

と、書く。ミルフィーユは、目をこすって頷いてお祈りを始める。それに続いて、ファリアも目を閉じ、祈りを始める。祈りながら、ファリアはあることを思い出していた。ファリアの声が失われることになった事件のことを。

ファリアが声を失ったのは七歳のときだ。

その日も今日と同じ聖夜祭の日だった。この日、ファリアの母親はファリアにプレゼントを買うために少し遠出をしていた。ファリアは家で母親が帰ってくるのを待っていたのだが、なかなか帰ってこなかった。母親が帰ってこないの、ファリアは泣き出し、ずっと泣き続けたのだが、やがて疲れて寝てしまった。そして、夜中に部屋の外で物音が聞こえたので、目を覚ましそっと覗いてみると。

そこにあっただのは変わり果てた母親の姿だった。綺麗だった母親の顔はぐちゃぐちゃになり、服もぼろぼろだった。母親は、帰り道にあるがけの崩落に巻き込まれたのだ。

その母親の姿を見た瞬間ファリアは声を失った。

ディラックは元盗賊なんだから、身軽だし大丈夫。そう何度も、自分に言い聞かせるがどうしても同じ状況でディラックが帰ってくることをどうしてもファリアは想像してしまう。

神様、どうかあの人を無事に私達のところに帰してください

と、もう何度目か分からないほどファリアが強くそう祈った時。

扉がノックされた。

ファリアは、ドアを開くことに恐怖を覚えつつゆっくりと扉を開いた。そこにいたのは。

「……ただいま、ファリア」

そう言っただけでファリアを抱きしめるディラックだった。

「パパ！」

ミルフィーユが泣きながらディラックに抱きついてくる。ディラックは、ファリアを離し、ミルフィーユを抱き上げて、ごめんな、

と頭を撫でてやる。

その様子を見て、しっかりとディラックの無事を確認したフェアリアの目からは涙が溢れてくる。

あの時、確かにディラックは瀕死の状態にあった。意識も失い、後は死を待つばかりだったのだ。なぜ、ディラックは助かったのか。ディラックは、意識を取り戻した時の事を思い出す。

意識を取り戻すと、ディラックは暖かい光に包まれていた。目を腹にやると刺された傷も消えていたので、ディラックは最初自分がもう死んでしまったのかと思った。

やがて、その光の一部がより強く輝きだし、人の形を取り始めた。ディラックが目を凝らしてみると、そこにいたのは伝承にしか出てこない天使だった。ディラックはその天使に、自分は天国に行けるのか、と聞いた。

しかし、天使は首を振り、強く貴方が死ぬのを望んでいないものが二人いる、と告げ、さらに、今日は聖夜祭だから、特別に奇跡を見せましよう、と言うのだ。

どういうことだ、とディラックは尋ねたが、天使はそれには答えず、消えてしまった。ディラックが途方にくれていると、周りの光が一層輝きを増し、目を開けていられなくらいになった。

そして、光が消え、ディラックがゆっくりと目を開けるとそこは自分の家の前だったのだ。

「……………」

「え？」

「ママ、今……………」

ディラックとミルフィーユは驚き、目を見張って、フェアリアのほうを見る。

「よかった……………。貴方が、無事で……………」

今度は、はつきりと聞こえる。

「ファリア、お前声が……」

ディラックにそう言われ、ファリアは潤んだ目を見開いた。そう、失われていた、そして、もう戻らないと思っていたファリアの声に戻ってきたのだ。

「よかったね、ママ！これで、私といっばいおしゃべりできるよ！」

ミルフィーユは嬉しそうにそう言う。それを聞いたファリアは、潤んだ目に一層の涙を浮かべ、今まで言葉にしたくても出来なかった言葉を、二人に贈る。

「愛してるわ、ディル、ミルフィーユ……」

これは、聖夜に天使の贈った二つの奇跡の物語。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1157d/>

聖夜の奇跡

2009年3月24日09時12分発行